



小説の未来 (13)

春日信彦

問題設定とドラマチック解答

まず、意外と意識されていない小説における問題の設定とその解答の特殊性について述べてみたいと思います。私たちは、生きていくうえで多くの問題にぶち当たっています。いや、具体化していけば無限の問題に囲まれて生きています。

大半の学生は、問題と言われると授業で学習されている受験のための数学や英語の問題を思い浮かべられることでしょう。そのような試験のための問題には、周知のことだとは思いますが、必ず一つの正解が存在するように作成されています。

おそらく、そのような試験のための問題を授業で毎日のように解いていると“与えられた問題を解いていくと必ず正解がある”という意識が強くなっているのではないのでしょうか。しかも、入学試験のような問題には、唯一の正解があるわけで、当然のことですが、正解がないような問題は作成されません。

当然、試験は、解答の正解不正解による得点化が目的ですから、問題作成時点において正解が存在しない問題は排除されることとなります。学生の皆さんにとっては、こんなことは、当たり前のことで、別段どこにも疑問点がないように思われることでしょう。

ここで、試験用の問題とそうでないぼんやりとした感情に関する問題について考えてみましょう。前者には、必ず正解があるわけですが、後者の解答には、正解と言えるものが必ずあるのでしょうか？また、感情に関する問題に解答がなされたとして、それを得点化できるのでしょうか？

ルールが明確でルールに厳格な数学であれば、必ず解法が存在し、その解法によって正解が導き出されます。多くの学生は、授業において多大な時間をかけて解法を記憶し、受験においては、短時間の解答時間内に、記憶した解法を用いて素早く解答しているのです。

条件が明確に設定された問題は、論理的思考と解法の記憶という手段を使って正解を導き出すことができます。でも、日常生活における複雑で難解な人間関係の問題は、どうでしょうか？

複雑に条件が絡み合った人間関係の問題に関しては、条件設定次第で無限の解答が得られると思われれます。ほとんどの人は、無意識に自分に都合の良い条件を設定して、無限にある解答の中から、一つか二つの解答を見つけ出します。そして、あたかもその解答が正解であるかのように思ってしまう場合が多いのです。

そこで、ぼんやりとした感情の問題と小説家とのかかわりを考えるわけですが、小説家は、いったいどんな問題を解き明かそうとしているのでしょうか？その点を考えて初めて、小説家の存在意義が浮き彫りになってくるように思えるのです。

あくまでも、私個人の考えではありますが、小説家とは、ぼんやりとした感情の問題にオリジナルな具体的事例を設定し、自然言語を使ってドラマチックに解答する芸術家と思っています。

多くの人にとって、正解が特定しづらいぼんやりとした感情の問題は、日常生活において意外と意識化、言語化されにくいものではないでしょうか？言い方を変えると、ぼんやりとした感情の問題は、あまりにも条件が複雑で、条件設定がしづらいために、言語を用いた具体的な問題として作成しにくいと言えるのではないのでしょうか？

たとえば、友達とちょっとしたことで喧嘩別れになったが、どのようにすれば仲直りすることができるのか？

好きな人に好きだと告白したいが、それができない気の弱い性格を変えたいがどうすればいいか？

いじめられている人を助けてあげたいが、そうすると今度は自分がいじめられるようで怖くて助けることができない。このような臆病な性格を変えたいがどうすればいいのか？

家族関係がうまくいかず、イライラが募って、誰かをいじめたくなってしまうそのような卑劣な性格を変えたいが、どうすればよいか？

夫の浮気を許したいが、心の底にある憎しみが消えず、この女の業と言えるような憎しみを消し去るにはどうすればいいのか？

このような感情に関する問題においては、具体的な条件を設定し、さらに問題を具体化されなければ、解答しにくいのではないのでしょうか。しかも、それらの問題に解答が得られたとしても、さらに条件を加味し続ければ、いくつもの解答がなされることとなります。

人間関係における問題には、性の違い、遺伝子の違い、生い立ちの違い、家族構成の違い、年齢の違い、言語の違い、風習の違い、宗教の違い、生活環境の違い、などのもろもろの条件によって、解答が無限にあると言っても過言ではないのです。

実生活においては、つかみどころがないぼんやりとした問題のほうがほとんどで、また、あまりにも条件が複雑すぎて明確な条件設定もできず、したがって、それらの問題に対する解答も定まらない場合が多いのではないのでしょうか。

このようなことを考えると、多くの人達は、悶々と悩み苦しむ日々を送っているのではないのでしょうか。だから、悩みを解消するために、宗教を信じたり、占いを信じたりする人がいるのでしょうか。

さらに、悩みによる苦痛が思考停止を引き起こすと、うつ病になったり、最悪な場合、人生を悲観して、自殺したりする人も出てくるのです。

小説創作の効用

人は、ぼんやりとした問題に取りつかれ、それらの問題に悩みますが、問題が解決されなければ、不愉快な悩みが鬱積していくことになります。悩みが鬱積していくと、もはや、悩みを引き起こしている問題を探り当てることも困難になっていきます。

私は高校生の頃から小説を書き始めたのですが、そのころを振り返ってみると、疑い深い私は、家族のこと、進路のこと、職業のこと、貧富の格差、戦争犯罪、人種差別、学歴差別、自分の性格などのぼんやりとした問題を無意識に抱え込んでしまったように思えます。そのためなのか、不必要な悩みが鬱積し、その悩みのはけ口として小説を書き始めたように思われます。

言い換えれば、小説の創作の過程で、心の中に巣くうぼんやりとした問題を自分なりの言葉で具体的な問題として設定し、恐る恐る自分の心を客体化しながら、試行錯誤で解答していたような気がします。そうすることによって、自分の気持ちを楽にしようとしていたように思われます。

当然、学生であれば、試験問題を解く解法を記憶することを優先すべきだったのですが、記憶力の悪い私は、記憶の苦痛から逃避するために、また鬱積した悩みからくる苦痛を少しでも軽減したく、小説を書き始めたのではないかと思えるのです。

そのころから、ぼんやりとした問題を具体的な事例に置き換え、自分勝手な解答を創作しては、自己満足していたような気がします。このような感情に関する問題の解答に時間を費やしても、受験科目の偏差値は向上しなかったわけですが、今思えば、生きていくうえでは役に立ったように思えます。

すでに述べたように、小説の創作は、複雑でぼんやりとした人間関係の問題を架空の世界で自分勝手に解答する作業ですから、ほとんど試験には役に立ちません。でも、人は、生きていれば、必ず、自分では解決できないような感情の問題にぶち当たるのです。ですから、小説の創作は、人によるのですが、生きていくうえでは役に立つ場合もあるのです。

私の場合は、幸運にも小説の創作によって生き延びてきたわけですが、優秀な小説家でありながら自殺した作家もいます。なぜ、彼らは自殺を選んだのでしょうか？彼らも小説の創作によって生き延びたと思うのですが、言語では解決できないほどの苦悩の重圧に耐えられなくなって自殺してしまったのでしょうか？

小説の創造は、自殺防止に役立つと思っているのですが、有島武郎、芥川龍之介、川端康成、三島由紀夫、太宰治などの優秀な小説家が自殺した事件を考えると、落ち込んでしまいます。それでも、若い人たちに対して、自殺するぐらいなら、小説を書いてほしいと訴えたいのです。

現実には、自殺したいほど悩み苦しんでいる人たちは多いと思います。現に、毎年、日本において3万人以上の方が自殺しています。実に残念で仕方ありません。人には未来がありますが、その未来を実現するには生きていることが絶対条件なのです。

小学校卒業後、働きながら文学を志し、歴史に残る文豪となった松本清張は、学生時代から心の支えとなっています。文学は、人間を見つめる心があれば、学歴や知識とは関係なくやれる芸術だと思います。

小説の創作において、架空の世界を創造するということは、自分や世界の未来を創造するということにもなるのです。今、悲しみと苦痛から逃避したいと思ったならば、自殺によって逃避するのではなく、小説の創作によって、自分勝手な未来を創造し、新たな自分を発見していただきたいと願う次第です。